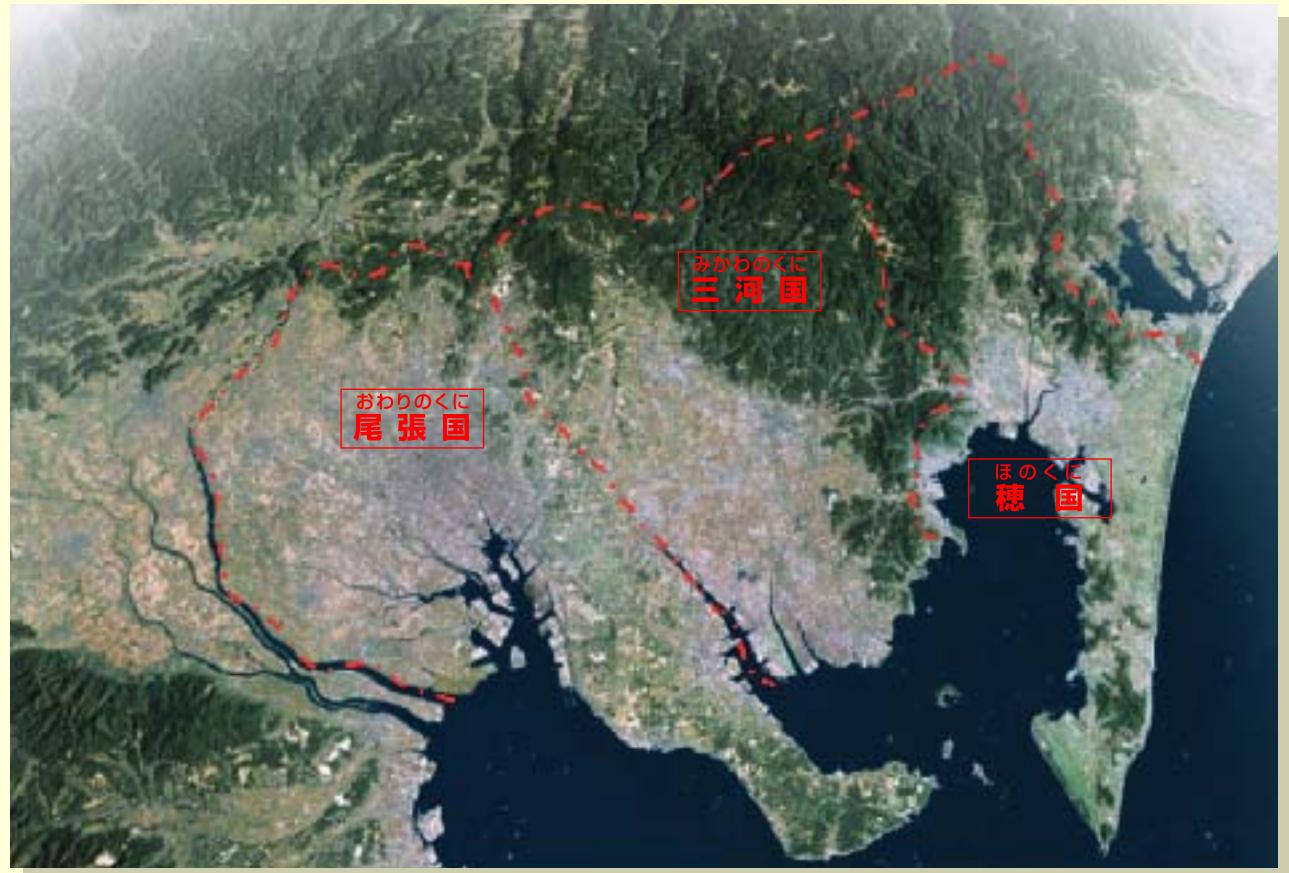


# すばらしい愛知圏域の未来を創造する。



私達、愛知地域建設コンサルタント協会は、異常気象の世紀、天変地異の世紀とまでいわれる今日において、愛知県民の声を聞き、前号（広報誌No.6）に県民のニーズを紹介しました。

当協会では、こうした県民のニーズを踏まえるとともに、地球温暖化・天変地異・首都移転・エネルギー問題・ゴミ問題・自然との共生などを視野に入れ、「すばらしい愛知圏域の未来を創造する」をテーマに掲げて、「過去・現在・未来」に区分し、愛知県の未来像を提案いたします。

本号では、私達の祖先が愛知県をどのように見ていたのか、愛知県の誕生と尾張国・三河国・穂国の国名の由来を、祖先のメッセージとして報告致します。また、愛知県内の旧郡地名に想いを込めた祖先のメッセージについては、次号から連続掲載致します。

## ■先人の想いに学ぶ

### 1. 県名に託した先人の想い

人であるためには「愛の心」がもっとも大切である。その次に「知性」である。

明治の先人が県名に託した「愛と知の県」の想いは、広く県民に理解され誇り意識になっています。

#### (1) 県名の由来

愛知県になる前は名古屋県でした。しかし明治新政府の印象が悪く（徳川御三家尾張名古屋藩）、府舎所在地の郡名「愛知郡」を県名にしたといわれています。

『角川地名大辞典』

## 2. 愛知郡の由来

県名の由来とされる尾張国の東部に位置する愛知郡は、古くは「あゆち」といい、和銅6年（712）郡名に好字（桂字）を用いることとされて以後は「愛智」の字があてられました。約1300年前の先人が、人として最も大切な「愛と智」を郡名表記文字にあてたのです。この想いは現代に引き継がれています。

のち「愛智」「愛知」は区別せず用いられるようになり、明治5年県名とともに郡名も「愛知」が定着しました。

### （1）あゆち・あいちの語源由来

#### 一説 「水の湧き出る所」

「あゆ」は湧き出る意で湧水の多いところとする説（愛知郡誌）。

#### 二説 「東風説」

東風を「あゆ」と訓む（万葉集）ところからめでたいもののもたらす風とする説（海上の道）。

#### 三説 「足結地説」

日本武尊は東国制定に当地で集結武装し、東国遠征の帰りに当地に立ち寄り、神剣を奉納した古事による。

#### 四説 「水（あ）が集（つ）まる地（ち）説」

土木屋の視点で、あゆち・あいちの語源を考えると、当時は多くの小河川が流れ込む湿原の地であった。このことから「あつち」と呼ばれていたのが「あゆち・あいち」になった。「あ」は水の意、「ゆ・み」は水路や堰の意であるが、「あつた（熱田）」の「つ」がなまって「い・ゆ」になったとも考えられ「つ（津）」は多く集まるの意がある。

## 3. 尾張国・三河国・穂国の誕生

古代の祖先は愛知圏をどのように眺めていたのでしょうか。大化の改新以前の愛知圏域は、尾張国（木曽川、庄内川地域）・三河国（西三河の矢作川地域）・穂国（東三河）の三国に分かれていました。大化の改新（646年1月）の詔により、全国に国と郡が設置され、国司と郡司が任命されました。この時に三河国と穂国が三河国に統一され、愛知圏域は、尾張国と三河国の二国になり、明治維新で愛知県が誕生するまで続いていました。

### （1）尾張国の語源由来

「おわり」にはどんな意味が隠されているのでしょうか。

#### 一説 「小さな開墾地が湖沼地帯に点在する国」

古事記に記される「袁波里」、日本書紀に記される「烏波利」が訛って尾張国になった。

#### 二説 春日井郡小針村の地名が国名になった。

### 愛知県誕生の歴史年表

- ◆明治元年、尾張国内に、犬山藩が成立。
- ◆同4年7月廃藩置県令により尾張国は名古屋県・犬山県の2県となる。
- ◆同年11月犬山県は名古屋県に合併。
- ◆同5年1月知多郡を額田県（三河）に移管。
- ◆同年4月2日名古屋県は愛知県と改称。
- ◆同年11月額田県と合併。
- ◆同11年郡区町村編制法の施行により名古屋区および愛知・春日井・丹羽・葉栗・中島・海東・かいせい・ちた・へきせい・はづ・ぬかた・にしきも・ひがしきも・海西・知多・碧海・幡豆・額田・西加茂・東加茂・きただいら・みなみしたら・ほい・あつみ・やな・北設楽・南設楽・宝飯・渥美・八名の18郡とされた。
- ◆同22年10月市制町村制施行、名古屋市に、当県は1市19郡となった。
- ◆木曽川氾濫による行政界の変更
- ◆同13年三重県桑名郡15か村を海西郡に。
- ◆同20年岐阜県中島郡4か村を中島郡に。
- ◆同20年当県海西郡松山中島村を岐阜県海西郡に移管。
- ◆同25年2月には海東・海西2郡を合併して海部郡とした。



## 三説 万葉集卷十三「小治田=小墾田」 之「年魚道」とする説。

一～三説いずれも水郷地帯の小さな開墾地を意味します。

## 四説 「犬の尾のように洪水のたびに川筋が 変わる扇状地に墾かれた国」

土木屋的視野で考えると、尾張国は、ちょうど水道ホースや犬の尾のように犬山を起点にして、木曽川が扇の弧を描くように振られ、洪水のたびに運ばれた大量の土石が堆積して扇状地が出来たところです。すなわち尾張の尾は、犬の尾のたとえです。はりは、開墾の墾を意味します。



犬山城天守閣

### 参考

木曽川は、犬山あたりから鵜沼川とか墨俣川と呼ばれ、尾張国には、「木曽八流あるいは七流」と呼ばれる多くの支川が流れています。「一之枝川(石枕川)二之枝川(般若川)三之枝川(浅井川)黒田川」など。

## ◆尾張国の表記文字に託した先人の想い

尾は、動物の尾のように長く延びるの意味があり、張りは意気地やひっぱる力、たるみが無くひきしまっているなどの意味があります。すなわち、子々孫々永久に日本国を気合でひっぱって行く國になろう、との想いが託されていると解釈されます。

先人のこの想いは、戦国時代の日本を統一した織田信長あるいは現在世界をリードする中部経済圏の中心地などで証明されるように、日本国をリードする気合の風土(土地柄)となっています。

## (2) 三河国の語源由来

なぜ「みかわ」と祖先は表現したのでしょうか。

### 一説 「三つの川が流れる国」

三つの川とは、矢作川水系の矢作川・巴川・男川の三川、それとも穂の国を流れる豊川も含まれていたのか。

### 二説 「川が流れる美しい国」

山と川の美しい国で「美川国」が三河国に表記された。

### 三説 「御河国」

本来三河国は河の国と呼ばれていましたが、西暦713年元明天皇の「風土記」選上令の内に、地名は二字にして桂字を用いることの詔があり。河の国に、御を付し「御河国」としたと言われる説が定説となっています。

### 四説 「御側の国」

カワは、母屋に対し外に在る家屋を廁という・果物の皮は果肉の外側、のように外側の意味があり、尾張国の外側に位置する国をカワの国と呼び、瑞祥のミを付し「御側の国」⇒ 参河国 ⇒ 三河国になった。



## ◆三河国の表記文字に託した先人の想い

三は、数の3、河は水が流れる大きな河の意味があり、先人は万物の生命の源である水をかなめとする国づくりを願い、水を育む山岳地帯、その水を利用して穀物を生み出す平野地帯、そして川から運ばれた滋養豊かな水で育つ魚の浜辺地帯の三地域が川水で結ばれる運命共同体の国つくりを想ったと解釈されます。この先人の「川で結ばれる運命共同体の国づくり」の想いは、世界に例を見ない300年もの長い間、戦のない平和な日本国を築いた徳川家康に引き継がれ、現代人の潜在意識として定着しました。

## (3) 穂国の語源由来

なぜ「ほのくに」と古代祖先は呼んだのでしょうか。

愛知県の東部、東三河に大化以前に存在していた国造支配下の国。三河各郡の位置関係からみて、奈良期の三河国7郡のうち宝飫(豊川)・八名(豊橋)・渥美の3郡がその範囲といわれます。穂の国名は、三河国の宝飫という郡名にひきつがれています。律令制下の三河国府は、宝飫郡すなわち穂国の根拠地に置かれていました。

### 一説 「稻穂が稔る豊かな国」

豊川下流の平野は、穂ヶ原と呼ばれ、古代から稻穂が稔る豊かな水田地帯を表現した郡名。

### 二説 「炎国」

豊橋地域には縄文土器遺跡が多く発掘されています、縄文土器を製造するに使われた炎を表現したか、あるいは炎を神と崇めている民族、もしくは富士火山噴火の火柱が見える国を表現したのか。

### 三説 「稻穂のように海に突き出た半島のある国」

渥美半島は古代から海上交通の要所である。  
土木屋的視点で穂国を考えたとき、太平洋に突き出た渥美半島が地形的特色である。



## ◆穂国の表記文字に込めた先人の想い

稻穂が豊かに稔る国を先人は願ったと解釈されます。先人の時代は、子孫繁栄の原則として、食物の確保が第一優先事項、このため自然災害が無いこと、太陽の光と温暖な気候そして水に恵まれることなどすべてが満たされて稻穂が豊かに稔る国を願ったと思われます。

## 次号予告

次号では<災害に強い愛知県つくり>の前段として、どうして“水害や液状化に弱い沖積地盤地帯(海岸地帯)に都市化が進んだのか”をテーマに取りあげます。